

ソーシャルキャピタルは絆か、しがらみか

○関西大学 安田 雪
関西大学 塩原 剛

1. 目的

本報告では、現在、多義的に用いられているソーシャルキャピタル概念を構成要素に分解し類型化するとともに、当概念の多義性の原因を議論する。類型化に際しては、Fernandez(2000)の指摘と、報告者らが収集・分析した東日本大震災時のデマ対応ツイートの事例を検討する。

2. ソーシャルキャピタル概念の多義性と問題点

ソーシャル・キャピタルは、社会組織が持つ、協調的な行動を促進する規範や信頼などの特徴(Putnam,1993)、社会関係が持つ、手段としての価値(Burt,1992)、特定の目的達成を可能とする生産的な社会関係の一側面。人間の構造に内在する。(Coleman,1990)、市場において見返りを期待してなされる社会的関係への投資として、社会的構造の中に埋め込まれた資源、目的をもった行動のためにアクセスされて動員されるもの (Lin,2002)など多様な定義が存在している。

これらに通底する構成要素の一つは人々の社会的関係だが、社会関係が他の構成要素(価値、協調、目的)をいかなるメカニズムで創出するのかについては議論が曖昧なままである。「絆」をはじめとする社会関係についての多数の概念がそうであるように、ソーシャルキャピタル概念も、ともすればメタフォーにとどまりがちであり、分析概念として精緻化されたとは言いがたい。

また、キャピタル(資本)という要素が示唆するのは、社会関係がいかにして経済的価値を創出するのか、そのメカニズムの解明・検証の必要性である。このメカニズムもこれまで必ずしも実証的に精査されてきたとは言いがたい。ソーシャルキャピタルは単なる「価値を持つ」ネットワーク以上のものでなければならないにも関わらず、この概念の未だ曖昧に使われているのである。

経済的価値創出に関しては、投資価値、投資の回収率、投資が回収されるメカニズムが特定できなければならないとする立場から、Fernandez et.al.(2000)が、コールセンターのオペレータの採用と定着率を事例に、投資と回収、費用対効果を金額ベースで計量しており、貴重な実証研究として注目しよう。資本的側面を重視し、もっとも狭義に考えれば、その価値を金銭に換算しえず、投資と回収の可能性をもたない「関係」はソーシャルキャピタルではないという考えかたさえあり得る。

一方、経済的価値という限定を除くならば、たとえば、互助という価値を創出した事例として、筆者らが検討した twitter 上のデマ防止情報拡散において、日常的な同質的な嗜好者の社会関係が震災直後の本来的性質とかけ離れた想定外の相互扶助機能を果たした例をあげうる。

ソーシャルキャピタルには、人のつながりという構造的側面、価値をもたらす見返りを与えるという機能的側面、そして金銭的価値・投資と回収可能性という資本的側面があり、各要素もその相互関係のいずれもが不可視なゆえに、強調する要素と関係によって概念が多様に用いられる。

3. 実践的含意

現在、濫用されがちな「絆」は、社会関係の有用性への期待の産物であるが、震災以前には我々は、様々な社会関係を「しがらみ」と呼び忌避しがちであったことも事実である。社会関係負債にならぬ社会関係資本、すなわち「しがらまない絆」の構築と維持こそが、現代の実践的課題である。

文献

Fernandez Robert M. Emilio J Castilla, Paul Moore(2000) “Social Capital at Work: Networks and Employment at a Phone Center” AJS vol.106.No.5 pp. 1288-1356.